

2018 年度第 3 回関東地区例会

ポピュラー音楽学会 要旨

題名：本土復帰前後の沖縄におけるロック受容とその展開—A サインクラブと基地内クラブとその周辺を対象に—

氏名：澤田聖也

所属：東京藝術大学 音楽研究科 音楽文化専攻 修士課程 2 年

本発表では、在沖米軍人・軍属の娯楽施設であった民間主導の A サインクラブと米軍主導の基地内クラブの実態を沖縄のロック・ミュージシャンの活動から具体的に描き出し、その空間が本土復帰によってどのように変化したのかを考察する。両者のクラブは「ミュージシャンが米軍人相手に最新の英米ロックを演奏する」という点で共通しているが、演奏環境、システム、契約、客層、タイムスケジュール、斡旋、音楽(ロックの種類)など多くの点で異なり、また、本土復帰によってこうした要素は変化していく。これらは、沖縄・アメリカ・本土の相互関係によって生じる社会的・政治的・経済的背景が大きく起因する。こうした背景を踏まえた上で、2つのクラブの実態を把握し、本土復帰によってどのように変化したのかを論じる。研究方法は、1次資料、2次資料における理論的考察と事例研究とする。インタビュー対象者は本土復帰前後に演奏活動をしていたロック・ミュージシャンである。

まず、演奏空間に入る前にそれを取り囲む周辺事象を調査した。ミュージシャンはクラブで演奏する準備段階として、最新の英米ロックを入手しなければならない。当時、一般的に最新レコードは民間レコード店で販売されていなかったため、ミュージシャンは独自の経路でこれらを聴取していたと推測できる。現段階の調査では①KSBK(商業英語放送局)②民間レコード店(PX や海外から流出したレコード)③クラブ内でのレコード交換の3つの入手経路が挙げられる。つまり、最新のレコードは米軍人経由で民間に出回り、沖縄のミュージシャンがそれを享受していた。

次に、ミュージシャンがどのような経緯で仕事を獲得していたのか調査した。A サインクラブにおける仕事獲得方法はミュージシャンと経営者の口頭契約である。その契約内容は「専属ミュージシャンとしての契約期間」、「演奏スケジュール」、「契約金」などであり、それに沿ってミュージシャンは米軍人相手に演奏をする。一方、基地内クラブでは①ミュージシャンがプロダクションに所属し、それを仲介に仕事を獲得する②ミュージシャンが MWR(娯楽施設を運営する組織)に直接行き書面契約をする、この2つの方法であった。しかし、仕事獲得率や契約内容は人種によって異なり、復帰前まではフィリピン人ミュージシャン(アメリカ人を除く)が優遇されていた。例えば、契約金の高さは「アメリカ人→フィリピン人→本土人→沖縄人」の順でランク付けされており、プロダクションも基本的にフィリピン人だけを受け入れていた。

こうした傾向は本土復帰によって変わっていく。フィリピン人中心から沖縄人中心の演

奏環境にシフトし、客層も米軍人に加え地元民や観光客も参入したことで、クラブ内では洋楽ロックだけでなく日本の曲やオリジナル曲も演奏されるようになった。こうした変化は斡旋業や契約内容などに視点を当てても顕著である。特に、復帰前後における A サインクラブの機能は大きく変化した。復帰前の A サインは単なる米軍人の娯楽施設にすぎなかったが、復帰後は本土デビューにつながる登竜門として重要な役割を担うことになる。復帰直後、本土のプロダクションは知名度の高いクラブミュージシャンを引き抜き本土デビューさせようとしていた。その結果、紫やコンディション・グリーン、喜屋武マリーなどのクラブ出身のミュージシャンが本土デビューするようになる。

このように、クラブとその周辺に視点を当ててみると、復帰による影響が音楽、契約内容、客層、活動の場など様々な点で見られる。アメリカ支配から解放はアメリカ的空間から沖縄・本土的空間への移行を意味し、それがクラブという異文化空間に反映されていると言えよう。報告者は戦後の沖縄ポピュラー音楽の切り口として、こうした実態把握における基礎研究に重きを置いた。